

看護学生の看護技術習得に対する認識 ～気管内吸引技術の習得過程をととして～

坂下貴子¹⁾・今井宏美²⁾・茂野香おる³⁾

【要旨】

看護技術習得においては、看護学生が自ら技術習得に向け取り組める能力を兼ね備えることが必要であると考え。今回、気管内吸引技術を題材に、学生自身が自主的に取り組み、合わせて自己の技術習得に対する考えを構築する授業プログラムを設けた。本研究の目的は学生の技術習得に対する認識について明らかにし、授業プログラムについて検討することである。学生が提出した課題レポートを質的記述的に分析した結果、6カテゴリ【看護技術習得の意義と取り組み姿勢】、【看護技術を習得している状態】、【看護技術を習得するための方法】、【練習をととしての自己の変化】、【不十分な看護技術習得による影響】、【学内における看護技術習得の限界】に集約された。学生は看護技術習得そのものの意義とその将来像を認識すると同時に、今現在の技術習得の限界を知り、そして技術習得が不十分である際の影響も認識することができた。これらは今後の看護技術習得のための学習動機となると考える。また看護技術を習得するための方法を認識したことは、今後学生が自ら技術習得に取り組むための原動力となると考える。今回の授業プログラムは自ら看護技術習得に取り組むことができる学生を育成できると考える。

キーワード：看護学生、技術習得、看護技術

I. 研究の背景

医療の高度化や患者の高齢化とそれに伴う患者の重症化、在院日数の減少といった医療情勢の変化に伴い、臨床現場においては高い看護実践能力が求められている。それに合わせ看護基礎教育現場では、看護学生が学ぶべき内容は漸増しているが、医療安全面や患者の人権確保という考えから看護学生の臨地実習では看護技術の実施の範囲が限られるようになっていく。このような臨床現場や看護基礎教育における現状は、新人看護師の看護実践能力の低下、特に十分な看護技術が身についていないという問題を引き起こしている。2007年に厚生労働省から出された「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」においても、看護学生の臨地実習の範囲や機会が限定される方向にあること、卒業時に一人でできる看護技術が少なく就職後自信が持てないまま不安の中で業務を行っていること、看護基

¹⁾ 城西国際大学看護学部看護学科

²⁾ 千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科

³⁾ 天理医療大学医療学部看護学科

礎教育で修得する看護技術と臨床現場で求められるものにはギャップがあることなどが述べられている。この問題は、新人看護師を受け入れる医療施設等の看護の質への影響はもちろん、看護師の早期離職への原因にもなっている(久保公子ら, 2009; 小元まき子, 工藤綾子ら, 2008)。

このような状況に対して、厚生労働省は、看護基礎教育現場や臨床現場に様々な提言をしてきた。(厚生労働省, 2003; 厚生労働省, 2004; 厚生労働省, 2007; 厚生労働省, 2011)。これに合わせ、看護基礎教育側も、臨床現場も、各施設において、教育方法や教育体制を検討してきた。(齊藤茂子ら, 2008; 熊谷雅美, 2010)

しかしながら、看護基礎教育現場と臨床現場それぞれが教育体制を整えるだけでは限界がある。看護基礎教育では、臨床現場の教育体制に対し自分自身でその教育体制に適応し、個々に取り組んでいける能力を兼ね備える学生を育成することが重要である。そのためには、これまでのように看護技術の習得そのものを目的とした教育の実施だけではなく、学生が自分自身の看護技術を習得する過程を意識化する教育が必要であると考えた。

このような背景から、我々は、基礎看護学領域の科目の最終単元において、気管内吸引技術を題材に、その技術の習得とともに、学生自身が練習方法を考え、自主的に取り組み、自己の技術習得に対する考えを構築する授業プログラムを設けた。気管内吸引技術は、清潔操作や技術実施前後の呼吸状態の観察の技術など、様々な技術の組み合わせで成り立っている。また、気道にカテーテルという異物を入れることにより患者にとっては苦痛を伴い、実施者の技術が未熟であれば、この苦痛は増し、また不適切な技術は、合併症をもたらす可能性があり、人体の構造や機能に関する知識が必要となる技術である。つまり、気管内吸引技術は、これまで学習してきた知識・技術を理解し総合的に考えて実施しなければならない技術であり、技術習得について考えるためには適切であると考え選択した。今回の授業プログラムにより、学生は看護技術を習得することに対してどのような認識をしたのかを明らかにした。

Ⅱ. 研究目的

本研究は、気管内吸引技術を題材にして、看護学生の気管内吸引技術習得のための取り組みの実態と、看護技術習得に関する認識を明らかにすることにより、今回の授業プログラムの意義について検討することを目的とする。

Ⅲ. 研究方法

1. 授業プログラムの概要

(1) 基礎看護学領域のカリキュラム構成(図1)

基礎看護学領域の看護技術に関する科目は、4科目から構成され、1年次・2年次に行われている。

気管内吸引技術は、この最終単元(図1の星印)で学習する。この単元の実施時期には、基礎看護学

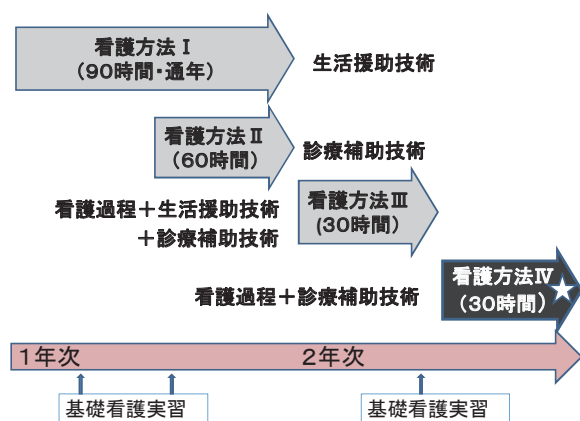


図1 基礎看護学領域のカリキュラム構成

自身の技術習得までのプロセスを確認することを掲げた。

気管内吸引技術習得の可否の評価のために、2月に技術試験を設けた。12月に講義を実施するとともに、2月の技術試験までに、学生自身が自主的に練習に取り組み、合わせて自己の技術習得について考えるプログラムであることを伝えた。1月には2回の技術演習日を授業時間内に設けた。基礎看護実習室には、常に気管内吸引の練習ができるよう、練習スペースを試験前日まで設けた。

領域を含むすべての領域における学内の講義や演習はほぼ終了に近づいている。

また、1年次に3日間、2年次に2週間の臨地実習(基礎看護実習)が行われている。3年次には約1年間の領域別の臨地実習が行われている。

(2) 授業プログラムの展開

本授業プログラムは、「診療補助技術～呼吸を整える技術」の単位の中で実施した(表1)。授業単元の目標に、気管切開をしている患者(モデル人形)への気管内吸引技術を習得すること、また、自分

表1 授業単元の内容

看護方法Ⅳ・単元:診療補助技術～呼吸を整える技術	
単元目標	
① 呼吸を整えるのための具体的方法を知るとともに、患者に必要な援助を選択できる～アセスメント、そして必要な援助へ	
② 実施した援助が、患者にどのような影響をもたらしたのか評価する必要性が理解できる～援助の評価	
③ モデル人形で、気管切開をしている患者の気管内吸引の技術を習得する	
④ 自分自身の技術習得のプロセスを確認する	
時期・回数	授業内容
12月・第1回	・講義 ・気管切開をしている患者(モデル人形)への気管内吸引実施ビデオ視聴 ・今後の演習予定と事前学習、気管内吸引技術試験までの取り組みについて説明
1月・第2回	演習:①気管内吸引の技術演習(第1回目) 教員のデモンstrーション・教員の学生個々への技術指導 ②体位ドレナージの技術演習
1月・第3回	演習:①気管内吸引の技術演習(第2回目) 教員のデモンstrーション・教員の学生個々への技術指導 ②酸素ポンプの取り扱い・酸素療法・吸入療法
2月・第4回	気管内吸引技術試験実施 テスト翌日提出 ①課題レポート「看護技術の習得について」 ②記録用紙「私の取り組み記録」、取り組んだことで提出可能なものを提出

2. 研究対象者及び分析対象

研究対象者は A 看護短期大学 3 年課程の 2 年生 63 名である。分析対象は、授業プログラム終了後に配布した技術試験までの取り組み方法に関する調査用紙および、学生が記載した課題レポート【看護技術の習得について】である。

3. 調査期間

2010 年 2 月

4. データ収集

授業プログラム終了後に配布した調査用紙は、2 週間後までに任意提出を求めた。調査内容は、気管内吸引技術試験まで授業以外にどのような方法で技術習得に取り組んだのかを調査するものである。選択肢として、[教科書を読んだ]、[手順書を作成した]、[教員に質問した]、[教員にデモンストレーションをお願いした]、[教員に自分の技術を見てもらった]、[気管内吸引のビデオを観た]、[友だちの練習を見学した]、[友だちとディスカッションして実技練習した]、[その他]を提示した。選択肢の設定については、1 年次からの授業の中で提示してきた方法や、学生のこれまでの取り組みから設定し、複数回答を可とした。また、各方法について、その方法で取り組んだ理由、取り組まなかった理由を自由記述で回答を求めた。

課題レポートは、【看護技術習得について～看護技術を習得することとはどのようなことであると考えているか】について記述を求めた。

5. 分析方法

(1) 調査用紙

気管内吸引技術試験までに学生が取り組んだ方法は項目別に単純集計を実施した。また項目ごとにその方法で取り組んだ理由及び取り組まなかった理由について、記述内容の類似性にしながら分類し、記述数を集計した。

(2) 課題レポート

課題レポートの記述内容を質的記述的に分析した。技術習得に関して学生が考えたこと気づいたことを学生の技術習得に対する認識とし、これを意味内容のまとまりごとに抽出し、これを 1 記録単位とした。その記録単位を内容の類似性に従い分類したものをサブカテゴリとし、更にサブカテゴリ間の関係を検討し、整理・統合してカテゴリを生成した。この作業を行う際、研究者間で合意が得られるまで検討を加え、分析の妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮

本研究については、研究者が所属している教育機関であるの倫理審査委員会の承認を得て行った(千葉県立保健医療大学研究倫理審査委員会 平成 21 年 6 月 29 日 承認)。研究対象者には、研究の趣旨の他、研究協力の任意性の保障、プライバシーの保護及び匿名性の厳守、研究目的以外に得られた情報を使用しないことについて、口頭及び文書で説明し、協力を依頼した。最終的な研究協力の意思については同意書で確認した。

IV. 結 果

研究協力に同意し、同意書を提出した学生は 51 名であり、調査用紙を提出した学生は 50 名であった。(調査用紙回収率：79.3%)。以下は同意書の提出があり、かつ有効回答であった 50 名の調査用紙と課題レポートを分析した結果である。

1. 気管内吸引技術試験にまでの学生の取り組みとその理由

学生が気管内吸引技術試験までに実施した取り組みの状況は、図 2 のとおりである。[友だちの練習を見学した] は 49 人(98.0%)、[教科書を読んだ] は 48 人(96.0%)、及び[友だちとディスカッションして実技練習した] は 47 人(94.0%)と、ほぼ全員の学生が取り組んでいる。一方、[気管内吸引のビデオを観た]、[教員にデモンストレーションをお願いした] は、6 人(12.0%)にとどまった。

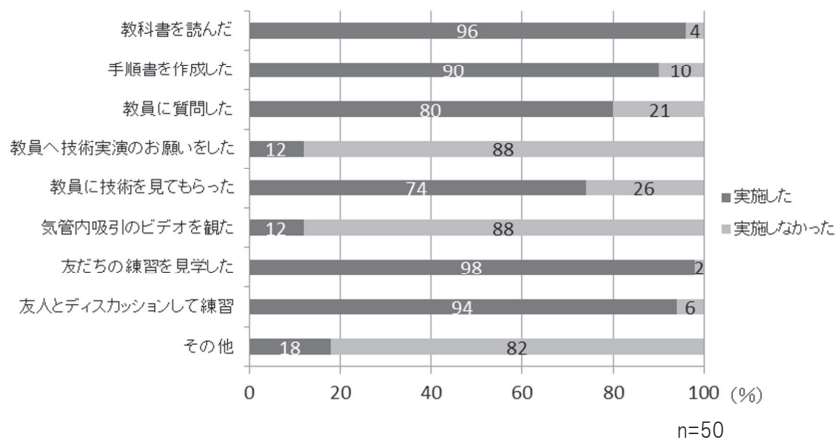


図 2 実施した取り組み

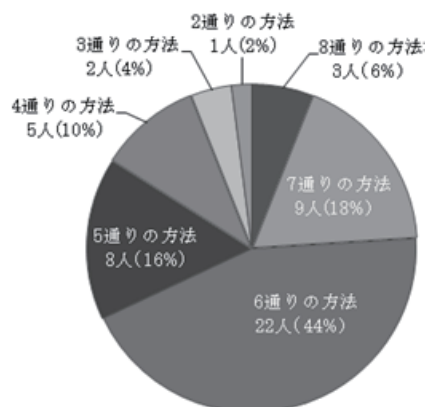


図 3 取り組み方法の数

1 人の学生が気管内吸引技術試験に向け、何通りの取り組み方法で練習したのかを、図 3 に表した。6 通りの方法が 22 人(44.0%)、7 通りの方法が 9 人(18.0%)であり、8 通りの方法で練習している学

生も3人(6.0%)いた。一方で、4通り以下の学生が8人(16.0%)いた。

方法ごとに、その方法で取り組んだ理由、及び取り組まなかった理由について集計したものが表2である。〔教科書を読んだ〕理由の多くは、「手順や手技を確認する」、「流れの把握や全体的なイメージ

表2 その方法で取り組んだ理由・取り組まなかった理由

①教科書を読んだ			②手順書を作成した		③教員に質問した	
取り組んだ理由	手順や手技を確認する	13	書くことで手順を覚えたり理解が促進される	12	疑問を解消する	13
	全く知らない状況であるから確認する	6	自分の中で整理する	8	教科書では疑問が解決できなかった	8
	流れの把握や全体的なイメージをつける	5	練習の振り返りに使う	6	自分の手技が正しいか確認する	7
	手順と根拠を確認する	5	流れや順番を確認する	6	自分の考え方や知識が正しいか確認する	4
	手順書作成のための参考とする	5	手技の根拠や留意点を確認する	4	自分が知らない新たな発見がある	4
	基本・基礎や知識を得る	5	自分の実施方法を見つける	4	心配である	2
	授業のための事前学習をする	4	自分に合った方法であり習慣である	4		
	留意点・注意点を確認する	2	教科書が重い	1		
	今までの習慣である	2				
取り組まなかった理由	読んでも理解できない	1	時間が取れなかった	2	他の手段(友だち・授業内容)で確認した	3
					時間がなかった	1
					分からないことが分からない	1
					質問事項がなかった	1
④教員に実技実演をお願いした			⑤教員に技術を見てもらった		⑥気管内吸引のビデオを観た	
取り組んだ理由	実際どのように実施しているか知る	3	自分の技術の改善点を指摘して欲しい	26	技術が確認できる	2
	自分の技術が不安である	1	自分の技術が不安である	7	イメージをつかむ	2
	自分が理解していることを再確認する	1	自分の技術が確かか確認してもらいたい	2	購入した書籍についていた	1
			自分が理解していることを再確認する	1		
取り組まなかった理由	授業でデモンストレーションを見た	15	教員への遠慮があった	2	思い浮かばなかった	6
	時間が無かった	7	他の手段(友人・授業)で代行した	2	授業でデモンストレーションを見た	6
	友人へデモを実施してるところと一緒に見た	4	教員と時間が合わなかった	2	ビデオの存在を知らなかった	5
	練習の時間にしたほうが身につく	2			練習を優先した	3
	教員への気恥かしさや遠慮がある	2			他の手段(友人・教員)で技術を見た	3
	他の方法で代行した	2			時間がなかった	2
				手順やイメージはわかっていた	2	
⑦友だちの練習を見学した			⑧友達とディスカッションして練習した		⑨その他	
取り組んだ理由	友人の良い点や改善点から自分の技術を改善する	26	疑問に思った点を解決する	8	・何度も繰り返して練習した ⇒頭で根拠を理解しつつ体も動くようにするため	3
	相手の技術を知り互いの技術向上のために協力する	8	よりよい方法を見つける	7		
	具体的な自分の改善方法がわかる	4	注意点・改善点を指摘しあう	7	・孔を作りカテーテルを入れる練習 ⇒カテーテル挿入の長さの感覚をつかむため	2
	参考になることや新しい発見がある	4	友人の意見や技術から自分の技術を改善する	6		
	手順やイメージがわかる	2	確認しながら練習する	4	・友人に技術チェックをしてもらった ⇒自分の技術の間違っていている所を確認してもらうため	2
	客観的に見る	1	自分たちで考えることによる技術の向上	4		
	友人の実施方法の理由を知りたい	1	自分の技術を見てもらう	2	・母親に訊いた⇒臨床ではどのようにやっているのか知るため	1
	自分の技術が不安である	1	根拠をしっかりと理解する	2		
			自分では気付かないことを知る	2		
無記入		1	友人の見学で充分であった	1		

*各項目の上段は“取り組んだ理由”、下段は“取り組まなかった理由”である

*その他には、具体的な方法とその理由の両方を記載した。(具体的方法⇒理由)

表3 看護学生の看護技術習得に対する認識

カテゴリ	n	サブカテゴリ	n	記録単位例	n=記録単位数
看護技術習得の意義と取り組み姿勢	14	技術習得は看護師としての必須事項	9	看護技術を習得するということはこれから看護師をめざす人たちにとって必須事項ではないかと考える	
		技術習得を目指した学習への積極的な姿勢	5	自分のものにするという姿勢が大切だと思いました	
		技術とその技術に関連する知識への理解	16	実際、技術を学ぶときは一つ一つの動きの根拠を理解していなければならないと考える	
		技術の向上と維持を目指した継続的な練習	13	知識と根拠を身につけ、繰り返し練習することが看護技術の習得であると考え	
看護技術を習得するための方法	59	あらゆる条件・状況に対応するための基本的技術・知識の獲得	12	看護は患者の状態によって大きく左右される。だからこそ看護技術に関する知識と根拠をしっかりと持ち、基礎となる部分を作り	
		患者の存在を意識した取り組み	7	患者さんに対しての直接的なケアとなるので、今まで習ってきたことを基準として一番良い方法を考えていくことが大切だと感じています	
		他者との学びによる技術の習得	6	友人の協力も必要であると考え。大丈夫だと思っ	
		練習をとおしたより良い実施方法・自分の練習方法の獲得	4	正しい技術を理解し繰り返し練習して自分のものにしていく必要があり、それが看護技術を習得することです	
		自信の獲得	1	安心して身を任せてくださいといえるくらいの自信をつけるのも大切であると思う	
		あらゆる条件・状況において対応できる看護技術力	31	同じ援助をすることになっても患者さんに合った方法で援助を行わなければならない	
		看護技術提供による患者への効果	25	…患者さんの生命を維持すること、また患者さんが安楽、快適に過ごせるようにすることである	
看護技術を習得している状態	80	技術とその技術に関連する知識の統合による看護技術	19	…技術の目的や必要性、患者に及ぼす影響などを理解した上で正確な技術を行なえるようにすることである	
		練習による自信や自己コントロールの獲得	3	知識を身につけその技術を繰り返し練習や実施し、自信をもってその技術に取り組むことが出来る状態だと思	
		実施することへの責任の存在	2	実施するときに自分がすることに責任を持たなければならないことだと思いました	
		練習による内面的変化や意識の変化	7	講義・演習・技術試験を通して自信とやる気が自分にあるのだとはじめて気がつくことができました	
練習をとおしての自己の変化	14	練習による自分の技術の変化	4	講義で得た知識を確認する必要もあったり、すべき段階が多くあったが自分なりに納得して技術を習得していけるようになったと思う	
		練習による知識の深まり	3	技術試験に向けてたくさん練習すると手順だけでなく、なぜこういう手順なのか、何でそれがだめなのかということに気づけたと思う	
		知識・技術・練習の不足による患者の安全性への影響	4	技術習得ができていない状態で援助を行なうことは患者の命にかかわる危険なことだと思	
不十分な看護技術習得による影響	11	知識・技術の未習得に対する不安	3	なぜそうしなければならないかということを根拠を知識として持っていなければ、自分の手技にも自信が持てず	
		周囲を見る余裕がないことによる技術への影響	2	自分の手技に精一杯で患者さんの状態を確認することは出来なかったけど、援助の目的を果たせていないというに最近思うようになりました	
		偏った技術の学び方による影響	2	体が覚えていても、何を目的でやっているのとか考えなければ結局マニュアルどおりしかできなくて、技術習得にはなっていなかったと思います	
		学内演習における技術習得の限界	7	どんなにモデルや学生相手に練習しても不安はゼロにならないと思う	
学内における技術習得の限界	8	モデル人形での現実の再現の限界	1	こうして学習してきた看護技術は、後に臨床で実際の患者に提供していかなければならない。モデル人形では現実味がかけるところもあったけれど	

「各自が自分の都合に合わせてできる限り練習を重ねていたことが技術獲得にはかかせないのだ」のように反復練習が必要なことや、「(その方法をとる)根拠は解剖生理や、今まで学んだものの積み重ねが必要であり、技術についても今までに習得しているものの応用であることが多く、双方に今までの経験・技術があって新たに技術を習得することができると考える」のように積み重ねにより技術が習得できると学生は考えており、《技術の向上を目指した継続的な練習》を認識していた。

「患者一人一人に合った技術を実施できるようにし、状況に応じて技術内容の工夫や応用ができるようにするためにも基礎となる看護技術を習得することが重要であると考えます」のように、《あらゆる条件・状況への対応のための基本の技術・知識の獲得》を認識していた。

また、技術・知識の基本の獲得だけではなく、「看護技術を習得するためには何の知識が必要か、どの手技が必要でそれを効率よく身につけるためにはどのように練習すべきかを理解することだと思います」、「つねにより良い方法を追求めし、学び、改善していくことであると考えます」のように、《練習をとおしたより良い実施方法・自分の練習方法の確立》を認識していた。

「これから先に自分が学んだ技術を提供する患者さんがいるのだということをしっかりと頭の中に入れて学ぶ」のように、《患者の存在を意識して取り組む》を認識していた。

「安心して身を任せてくださいといえるくらいの自信をつけるのも大切であると思う」のように、《自信の獲得》も看護技術を習得するための方法として認識していた。

「それに気づいたのが友だちや先生に実技を見ていただいたときである。思いもよらなかったことを質問されて答えられなかったことは何度もあったが、そこで自分の不足を発見できるのだと思う」や、「お互いの練習を見合って、悪い部分や注意すべき点などを指摘しあうことで、お互いの技術の習得及び向上につながる」のように、自分だけではなく、看護技術を習得するための方法として《他者との学びによる看護技術の習得》を認識していた。

(3) 看護技術を習得している状態

【看護技術を習得している状態】とは、学生にとって、看護技術を習得しているという状態がどのような状況であるのか、その理想・将来像についての学生の認識を示したカテゴリである。このカテゴリは5つのサブカテゴリ、《あらゆる条件・状況において対応できる看護技術》、《看護技術提供による患者への効果》、《技術とその技術に関連する知識の統合による看護技術》、《練習による自信や自己コントロールの獲得》、《実施することへの責任の存在》が含まれた。

「臨床に出たときには一人一人に合った援助を判断して援助ができるまでが正しい技術の習得なのだと思う」、「いつ行なってもきちんとできる状態であることだと考える」のように、いつでも実施できる力を持っていることなど、看護技術を習得している状態として《あらゆる条件・状況において対応できる看護技術》を認識していた。

「看護技術を習得するということは、患者さんの苦痛を軽減できたり、患者さんの今の状態を維持していくために大切なことであると思います」のように看護技術を提供することで患者さんに安全と安楽が提供されることや、「吸引は患者さんに苦痛を与えてしまう処置だと思うので、その苦痛をどれだけ少なく行なえるかが大切であり、また確実な手技が必要だと今回の授業で感じた」のように、苦痛を伴う援助であってもその苦痛が最小限であることなど、看護技術を習得している状態として《看護技術提供による患者への効果》を認識していた。

「技術を習得するということは、体の仕組み、身体の機能、外界との関係など様々な知識が習得できないと習得できないものであると思った」のように技術に関連する知識の理解を前提にした看護技術であることや、「どのような副作用が起こりうるのか考えながら実施後観察できること、技術

を実施したことで患者さんにどのような効果があったか観察できることなども重要なだと思います」のように実施前後の観察まで含めた看護技術であること、さらには「なぜそのように行なうのかを理解し、患者に説明できる状態であると思います」のように、患者に説明できる力も含めた看護技術であることなど、看護技術を習得している状態として《技術とその技術に関連する知識の統合による看護技術》を認識していた。

「知識を身につけ、その技術を繰り返し練習し、自信をもってその技術に取り組むことが出来る状態だと思う」のように練習により自信を獲得していったり、「緊張したときに自分を落ち着ける方法を身につけていかないといけない」のように、練習によって自己コントロールができるようになるなど、看護技術を習得している状態として《練習による自信や自己コントロールの獲得》を認識していた。

「実施するときに自分がすることに責任を持たなければならないことだと思いました」のように、《実施することへの責任の存在》も、看護技術を習得している状態として認識していた。

(4) 練習をとおしての自己の変化

【練習をとおしての自己の変化】とは、技術習得のための練習をとおして、自分自身に起きた変化に関する学生の認識を示したカテゴリである。このカテゴリは3つのサブカテゴリ、《練習による内面の変化や意識の変化》、《練習による自分の技術の変化》、《練習による知識の深まり》が含まれた。

「技術試験ではうまくできなかった部分もありましたが講義・演習・技術試験を通して自信とやる気が自分にあるのだとはじめて気がつくことができました。看護技術を習得するということは知らない自分に気がつくことができるものすごいものだと思います」、「目の前にいる患者さんが苦しそうにしているなら絶対に助けないといけないと思いながら練習できるようになりました。練習に対する心構えと意気込みが自分の中で今までとは全く違った気がします」のように、《練習による内面の変化や意識の変化》を認識していた。

また、「講義で得た知識を確認する必要もあつたり、すべき段階が以前よりも多くあつたが自分なりに納得して技術を習得していけるようになったと思う」のように、練習をとおして自分の納得いく技術を獲得するなど、《練習による自分の技術の変化》を認識していた。

「でも手順書を作っていくうちに、一つ一つの根拠と注意点が頭に入ってきて練習で実施していくと、さらにその根拠や注意点の意味が深まり、練習するのが楽しくなりました」のように、《練習による知識の深まり》も認識していた。

(5) 不十分な看護技術習得による影響

【不十分な看護技術習得による影響】とは、看護技術が未習得の場合に起こりうる影響についての学生の認識を示したカテゴリである。このカテゴリは、4つのサブカテゴリ、《知識・技術・練習不足による患者の安全性への影響》、《知識・技術の未習得に対する不安》、《周囲を見る余裕の欠如による不適切な援助の実施》、《偏った技術の学び方による影響》が含まれた。

「実施者の知識不足・理解不足・練習不足により、提供する技術に誤りが起こってしまい、患者

さんに苦痛な思いや、症状の悪化を与えてしまう可能性があるということを意識しなければならないと思いました」のように、不十分な看護技術習得による影響として《知識・技術・練習不足による患者の安全性への影響》を認識していた。

「今の私はどの技術も実際の患者に実践できるレベルには達していないと思っていて、このまま社会に出ることに対して非常に不安である」のように、《知識・技術の未習得に対する不安》を認識していた。

「看護技術は実際に患者さんに行うものであり、私たちが自分のことだけで頭がいっぱいになってしまっただけでは患者さんに安全な技術を提供することはできないと思う」のように、《周囲を見る余裕の欠如による不適切な援助の実施》を認識していた。

「手技の面だけに着目すると、なぜそうするのかを理解できず、臨機応変な対応が出来ないことや、それぞれ患者さんの状態に合った援助とならないことが考えられる」のように、《偏った技術の学び方による影響》を認識していた。

(6) 学内における看護技術習得の限界

【学内における看護技術習得の限界】とは、技術習得のために取り組んでも、学内だけでは、何らかの限界が存在しているという学生の認識を示したカテゴリである。このカテゴリは、2つのサブカテゴリ《学内演習における技術習得の限界》、《モデル人形での現実の再現の限界》が含まれた。

「目標がどうしても試験に受かることになってしまい、試験が終わるとほとんどやらないでいる。そのため、学校では一次的な技術の獲得で終わってしまう」や「習得したといえるようになるには臨床現場で数をこなせるようになってからではないかと思う」のように、《学内演習における技術習得の限界》を認識していた。

また、「学習してきた看護技術は、後に臨床で実際の患者に提供していかなければならない。モデル人形では現実味がかけるところもあったけれど、」のように、《モデル人形での現実の再現の限界》も認識していた。

V. 考 察

1. 学生の看護技術習得のための取り組みの現状

学生は、様々な方法を用いながら、気管内吸引技術の習得に向け取り組んでいた。今回の授業プログラムの実施時期が2年次の1月を中心としており、基礎看護学としての看護技術の学習が最終段階に来ていることや、他科目においても学内での学習が最終段階にきている時期であることから、多様な取り組み方法で練習することが可能であったと考える。

また、“その方法で取り組んだ理由”(表2)から、それぞれの取り組み方法に対し何を期待するかが学生の中である程度明確になっており、自分の技術習得の課題に応じて練習方法を考えることができていたと推測される。例えば「教科書を読んだ」理由から、今回の気管内吸引技術において教科書は、その技術の手順やイメージをつかむ役割、知識を確認するため役割として学生は期待し、使用してい

たと考えられる。〔教員に質問した〕や〔教員に自分の技術を見てもらった〕理由から、学生にとって教員は、自分の疑問を解決する人、手技や知識が正しいかを判定する人という期待があるものと考えられる。これは技術試験が最終的に存在していることが影響していると思われる。しかし、学生にとって、技術習得における教員、つまり見本となる技術を持っている人という存在が、これまで自らが構築してきた技術や知識を確認するために、また自らの技術を評価するために必要であったことが、取り組んだ理由から考えられる。〔友だちの練習を見学した〕や〔友だちとディスカッションして実技練習した〕理由から、学生にとって友だちは、技術習得していく上で、自らの鏡となる存在であり、お互いの技術を高めていく存在であると期待していることが推測される。

今回〔気管内吸引のビデオを観た〕、〔教員にデモンストレーションをお願いした〕に取り組んだ学生は 49 人中 6 人(13.0%)と少数であった。看護技術習得においてビデオ教材などの映像教材の有用性はこれまでの研究で認められている(長家智子ら, 2009; 中澤貴代, 2008)。しかし〔教員にデモンストレーションをお願いした〕に取り組まなかった理由、「授業でデモンストレーションを見たから」や、〔気管内吸引のビデオを観た〕に取り組まなかった理由、「授業でデモンストレーションを見たから」、「手順やイメージはついていたので」から、映像は学生に技術のイメージを与え、具体的にどのようなものか、どのように行っているのか流れをつかむといったことには効果があるが、何回も練習を重ね技術習得を目指す段階では、ビデオ教材の技術や教員の技術など見本となる技術ではなく、友人の学生の技術のほうが、学生にとっては有用であることが考えられる。小林ら(2003)は、学習する看護技術によっては、デモンストレーションのほうが有効である可能性や、学生は自己学習においてビデオのみではなく他の方法と組み合わせながら必要に応じてビデオ教材を役立てていることを述べている。教員はビデオ教材などの映像教材を何の目的で教材として利用するかを十分考え、学生に提示していくことが必要である。

2. 学生の看護技術習得に対する認識

(1) 看護技術習得とその将来像

【看護技術習得の意義と取り組み姿勢】にある《看護技術習得は看護師としての必須事項》から、学生は、看護技術習得の意義を看護職という専門職のものとして位置づけることができていた。そしてこの技術習得に対する認識は、《看護技術習得を目指した学習への積極的な姿勢》という学習態度への認識につながっていると思われる。

【看護技術を習得している状態】が抽出されたように、具体的な看護技術の習得した状態、自己の将来像を認識することができていた。田島(2009)は、看護技術の概念において、看護技術は認知・情意・精神運動領域構成されていること、つまり技術そのものだけではなく、その技術を行う際に必要な知識や興味・関心から成立していることを述べている。また、看護技術について川島(2002)は武谷三男の技術の適用説を用いて、「看護技術とは看護実践における客観的法則の意識的適用」と述べ、看護技術の基本である原理・原則、行為を可能にする原理を知識として理解するとともに、その技術の方法を身につけ、さらにはトレーニングによって、技術から技能、すなわち個人の技に変えていくことの必要性を述べている。つまり、技術と技能化の統一によって、あらゆる対象(患者)

に適応できる看護技術につながることを伝えている。このような看護技術の在り方が述べられる中、《技術とその技術に関連する知識の統合による看護技術》や《あらゆる条件・状況において対応できる看護技術》は学生の看護技術習得の将来像でもあるが、また同時に看護技術そのものを表したものである。

また、【練習をととしての自己の変化】が抽出されたように、学生は今回の技術習得のための練習をととして、練習により自信がつくことや、責任感が芽生えること、これまで知らなかった自分に気づくことなどを体験しており、これら体験が【看護技術を習得している状態】として《練習による自信や自己コントロールの獲得》、《実施することへの責任の存在》が抽出されることにつながったと考える。この授業プログラムをととして学生は、看護技術習得とは単に患者へ提供する看護技術を習得することだけではなく、自己の内面にも関与してくることを認識したと思われる。

(2) 看護技術を習得するための方法

《技術とその技術に関連する知識(目的・合併症・手技の根拠・解剖生理学など)への理解》、《あらゆる条件・状況への対応のための基本の看護技術・知識の獲得》は、【看護技術を習得している状態】の《技術とその技術に関連する知識の統合による看護技術》や《あらゆる条件・状況において対応できる看護技術》と対応しており、看護技術の習得した状態、自己の将来像と、現在取り組むべきことを対応して考えることができていた。また、《他者との学びによる看護技術の習得》を認識していた。多くの学生が、他の学生の練習を見学したり、ディスカッションをして練習していた経験から、その有用性を認めたと推測する。その有用性とは、その方法で取り組んだ理由(表 2)から、友だちの技術や、友だちや教員の指摘により自己の課題が明確になるということが一つである。技術習得のためには、他者の力も必要であることの認識につながっていることが推察される。

《技術の向上を目指した継続的な練習》における学生の記述から、技術習得のためには、反復練習が必要であることや、看護技術は一度実施した、経験したからできるようになるものではなく看護技術習得になるためには、その技術の再現性が可能であること、そのための継続した練習が必要であることも認識していた。学生はこれまで学内での看護技術の練習や臨地実習での患者への看護技術の実施の経験をしているが、これらは学生にとっては技術を経験したことにと過ぎず、自らの技術の習得には至っていないことも認識していると思われる。【不十分な看護技術習得による影響】の《知識・技術の未習得に対する不安》の学生の記述にある「正直今の私はどの技術も実際の患者に実践するレベルには達していないと思っていて、このまま社会に出ることに対して非常に不安である」はその一つの表れと考える。しかし、技術習得とは容易に成し得ないものであり、継続した練習が必要であるという認識につながっていることが推察される。

また、学生はこれまでの講義や臨地実習をととし、学生には具体的な患者像があり、援助による患者への影響を想像できる能力が育成された時期であるため、《患者の存在を意識した取り組み》が抽出されたと考えられる。その関連として、【不十分な看護技術習得による影響】において《知識・技術・練習不足による患者の安全性への影響》が抽出されたことや、【看護技術を習得している状態】の《看護技術提供による患者への効果》が抽出されたことも同様であると考えられる。このような認識

ができていたからこそ、【学内における看護技術習得の限界】、《学内演習における技術習得の限界》、《モデル人形での現実の再現の限界》が抽出されたと考えられる。このように学生は技術習得について患者と結び付け認識することができていた。

3. 授業プログラム意義

学生は、【看護技術を習得するための方法】として《技術とその技術に関連する知識への理解》を認識しており、また【看護技術を習得している状態】として《技術とその技術に関連する知識の統合による看護技術》と認識していた。坂本(2009)は、「基礎教育では原理・原則を踏まえた、基本となる技術の確実な獲得が必要であり、1つの技術ができた、できないという評価の軸ではなく、エビデンスに基づいた原理・原則を理解することが技術習得として重要である…途中略…体験を繰り返せばよいのではなく、一連の知識・技術を統合して学びとするプロセスが重要なのだ」と基礎教育における看護技術教育の方向性として、知識と技術の統合することが必要であることを述べている。また、厚生労働省(2011)から出された「看護教育の内容と方法に関する検討会告書」においても、知識と実践の統合の必要性を述べている。今回の授業プログラムは、学生にとって自らその必要性を認識する機会となった。

また、川島(1994)は、「学内で、講義や実習で、ある技術を知識として学んでいたとしても、それを、患者ケアに役立つ実践にするためには、反復トレーニングをして、身につける必要があることは当然である、つまり、主観的で個人的な技術に解消しない限り完成した実践たり得ないのである」と述べ、看護基礎教育において学生の技能の育成、つまり看護技術の原理原則についての知識とそれに基づく技術から、患者ケアに役立つための看護技術に訓練する必要性を伝えている。【看護技術を習得している状態】では《あらゆる条件・状況において対応できる看護技術》や、【学内における看護技術習得の限界】では《学内演習における技術習得の限界》、《モデル人形での現実の再現の限界》が抽出されていることから、今回の授業プログラムは、学生にとって対象に応じた看護技術を習得することの必要性を認識する機会となった。このように今回の授業プログラムにおいて、学生は自ら看護基礎教育における技術教育に必要な要素を体験する機会となった。

そして気管内吸引技術を用いた今回の授業プログラムをとおして、看護技術習得そのものの意義とその将来像を認識すると同時に、今現在の技術習得の限界を知り、そして技術習得が不十分である際の影響も認識することができた。これらは今後の看護技術習得のための学習動機となると考える。また看護技術を習得するための方法や技術習得による自己の変化への認識は、今後学生が自ら技術習得に取り組むための原動力となると考える。今回の授業プログラムのように、自己の技術習得に対する考えを構築する授業プログラムの実施は、看護基礎教育においても、看護職として臨床現場に入った際にも自ら技術習得に取り組むことができる学生を育成できると考える。

VI. 結 論

1. 学生は気管内吸引技術習得のために様々な方法で練習をしていた。[教科書を読んだ]・[友だちの練習を見学した]・[友だちとディスカッションをして実技練習をした]の取り組み方法は、ほぼすべての学生が実施していた。一方で、[気管内吸引のビデオを観た]、[教員にデモンストレーションをお願いした]は、6人(12.0%)にとどまった。
2. 学生が提出した課題レポートを質的記述的に分析した結果、看護技術習得に対する認識として、6つのカテゴリ、【看護技術習得の意義と取り組み姿勢】、【看護技術を習得するための方法】【看護技術を習得している状態】、【練習をとおしての自己の変化】、【学内における看護技術習得の限界】、【不十分な看護技術習得による影響】に集約された。
3. 気管内吸引技術を用いた自己の技術習得に対する考えを構築する授業プログラムの実施により、学生は看護技術習得そのものの意義とその将来像を認識すると同時に、今現在の技術習得の限界を知り、そして技術習得が不十分である際の影響も認識することができた。これらは今後の看護技術習得のための学習動機となると考える。また看護技術を習得するための方法や練習をとおしての自己の変化を認識したことは、今後学生が自ら技術習得に取り組むための原動力となると考える。今回の授業プログラムは、看護技術習得に取り組むことができる学生を育成できると考える。

謝 辞

今回の研究にご協力いただきました看護学生の皆さんに深く感謝いたします。

文 献

- 小元まき子, 工藤綾子, 服部恵子, 永野光子, 藤尾麻衣子(2008). 看護師の離職を招いた要因ー基礎看護教育課程修了後6年未満の看護師に焦点をあててー. 順天堂大学医療看護学部 医療看護研究, 4(1), 72-78.
- 川島みどり(2002). 看護の技術と教育 看護の時代 3(p.44). 勁草書房.
- 川島みどり(1994). 看護技術の現在 看護の時代 2(p.39). 勁草書房.
- 久保公子, 上釜真須美, 竹下エミ子(2009). 新卒看護師の感じる苦痛と離職を考える理由に関する調査. 日本看護学論文集 看護管理, 39, 3-5.
- 熊谷雅美(2010). 「つなげる」研修で新人看護職員を支援する 基礎教育と臨床現場、現場教育と集合教育を「つなげる」研修方法, 看護展望, 35(9), 4-9.
- 厚生労働省医政局看護課(2003). 看護基礎教育にける技術教育のあり方に関する検討会報告書.
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html>
- 厚生労働省医政局看護課(2004). 新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会報告書.
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/03/s0310-6.html>.

厚生労働省医政局看護課(2007)．看護基礎教育の充実に関する検討会報告書．

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>.

厚生労働省医政局看護課(2011)．新人看護職員研修に関する検討会報告書．

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000128o8-att/2r985200000128vp.pdf>

厚生労働省医政局看護課(2011)．看護教育の内容と方法に関する検討会報告書．

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf>.

小林知春，佐藤晶，坂田五月(2003)．基礎看護技術の自己学習支援システム(第 1 報)．聖クリストファー大学看護学部紀要，11，145-153.

齊藤茂子，高橋淳子，加藤奈保美(2008)．新カリキュラムが求める技術教育とは．看護教育，49(6)，490-496.

坂本すが(2009)．看護の信用—へこたれない看護師を育てる基礎教育—．看護展望，34(6)，553-55.

田島桂子(2009)．看護実践能力の育成に向けた教育の基礎 第 2 版(p.50)．医学書院.

中澤貴代，矢野理香，青柳道子(2008)．複数のマンシェット装着動作を視聴する新教育プログラムの効果．日本看護学教育学会誌，18(2) 18，31-39.

長家智子，末次典恵，大池美也子(2009)．【e ラーニングに舵を切れ！教育から学習へ】e ラーニングの目的と期待できる効果 基礎看護技術の修得に役立つ画像・動画入りコンテンツ．看護，61(14)，32-35.

Nursing Students Awareness of Actual Learning Conditions Observed Through the Process of Tracheobronchial Suction

Takako Sakashita, Hiromi Imai, Kaoru Shigeno

Abstract

In learning nursing skills, it is necessary for students to develop the ability to independently engage in self-learning. We implemented a training program on tracheal aspiration in which students themselves selected the practice method, independently engaged in training, and developed thoughts on self-learning skills. The objective of the present study was to elucidate students' awareness of learning of skills and to discuss this type of technical education. Qualitative descriptive analysis of reports submitted by students revealed the following six categories: "significance of learning nursing skills and attitude toward learning", "awareness of the condition of learning nursing skills", "measures for learning nursing skills", "changes in oneself during practice", "effects on self and others of learning inappropriate nursing skills", and "limitations of learning skills in a nursing skills laboratory". Implementation of this type of technical education, which enables students to experience realizations in the learning of skills, may lead to the development of students' ability to learn skills independently.

Key words: nursing student, learning nursing skill, nursing skill